

# 類書の研究序説(三)

—五代十国宋代類書略史承前—

枋尾 武

類書参考書目補遺

五、宋代類書略解下

十二、重廣會史 十三、海錄

碎事 十四、白孔六帖 十五、

紺珠集 十六、類說 十七、

皇朝事實類苑 十八、錦繡萬

花谷 十九、事文類聚 二十、

記纂淵海 二十一、全芳備祖

二十二、山堂考索 二十三、

古今合璧事類備要 二十四、

源流至論 二十五、玉海 二

十六、小學紺珠

## 五、宋代類書略解下

(12) 重廣會史 百卷 北宋末か 佚名

本書の成立は前田尊經閣蔵本の末尾に朱印文で「高麗國十四葉辛巳歲藏書大宋建中靖國元年大遼乾統元年」と

あるのと所収の最も新しい資料が新唐書であることから、新唐書進表の北宋の仁宗嘉祐五年（一〇六〇）から北宋の徽宗建中靖國元年（一一〇一）以前と考えられる。宋史藝文志類事部に著録されているとはいえず、尊經閣本が天下の孤本である。今は尊經閣叢刊により容易に見ることができ、前後に序跋なく、成立事情を知ることはいできないが、一百卷中、五百五十余目、ほとんど正史を引き、わずか教条にわたり左傳及び子書を取るにすぎない。その内容はほとんどが治道に関わるものであり、引かれた資料はよく古体をとどめている。尊經閣叢刊の解題に「冊府元龜に倣ひ、標題の體は、通鑑總類に似たり」といわれるように、教化、化民以德、擧賢受賞といった要を得た標題のもとに一行約二十二字數行の文を引いている。たとえば卷八十八の朋友の目を見ると、

前漢張耳傳陳餘年少父事耳相爲刎頸交

といった形で、後漢朱穆傳論のように注も加えた長い引用も稀にある。

この書は形式と内容から考えると既に述べた蒙求や左傳法語・史記法語の類と同じ系列に入るものであろう。また、日本に於ける管蠡抄・玉函秘抄・明文抄等もこれに類したものである。

多くの類書が大項目の下に子目を設ける方法をとらずいきなり小項目の羅列になっているので条理の一貫性がないが、科擧の試験の学習用にはむしろ実用性を發揮したと思える。

(13) 海録碎事 二十二卷 南宋・葉廷珪撰

葉廷珪の伝は宋史になく、陸心源の宋史翼に見える。四庫提要によると、葉廷珪は字を嗣忠といい、崇安の人である。徽宗の政和五年（一一一五）の進士である。

この書は撰者四十余年の読書によって得られた記録を海録と称し、高宗の紹興十八年(一一四八)の秋、病を得たつれづれに百七十五門に碎き分類し、二十二卷の書にし、紹興十九年五月二十七日に序を書いている。同書には紹興十九年十一月十九日の傳自得の序があり、この頃に刊行されたと考えられる。

明嘉靖間劉鳳校刊本。明萬曆戊戌(二十六年)一五九八)沛劉應廣刊本(臺灣新興書局影印本あり)。松崎復校文化十五年跋刊本(萬曆刊本の復刻本)等の諸本があり、萬曆刊本の序を見ると、劉鳳序、葉廷珪序、傅安道序があり、その総目を有し、天・地・衣冠服用・飲食器用・聖賢人事・帝王・臣職・鬼神道釋・百工醫技・商賈貨財・音樂・農田・文學・武・政事禮儀・鳥獸草木の諸部の下に百七十五門に細分されている。たとえば、卷十三、鬼神道釋部は、仙・道・道士・佛・僧・宗門・梵語・經・鬼神・妖幻・寺宇・宮觀・養生・怪異の諸門に分かれ、さらに子目に分類される。怪異門に例をとると、科斗郎君・輕紅輕素・橘中樂・龍根脯・借螻蟴領・起亡膏・神和國・庇生顧摠・嬌羞娘・匿影囊・降雪起風・炎沙罰・胡行周・烏將軍・捧筆奴・仙娥娘・呂走天年・玉龍子・虎生角・甌仲舒・犬歌・石媚虬・禍斗・妙花・柳將軍・管子文・眞眞・賣鬼・黃秀爲熊・芙蓉館・海童辺路・鬻精となっており、引用文は必ずしも全文を引かず、主要部分にとどめるものも多い。出典の示し方も必ずしも一定せず、文初に置くもの、文末に小さく記すもの、同じ出典によるものは文初、文尾にまとめて示すものも見られる。また、出典を示さぬものもある。一例を引くと

烏將軍

晉汾間、有<sub>二</sub>烏將軍<sub>一</sub>、能禍<sub>二</sub>福<sub>一</sub>。人<sub>一</sub>、鄉人每歲擇<sub>二</sub>処女之美者<sub>一</sub>嫁<sub>レ</sub>焉。郭代公殺<sub>二</sub>之乃塚間<sub>一</sub>、大猪精也。已上

幽怪録牛僧孺所撰

の如きである。その引用の姿勢は逸話中心であり、好事家・博学者としての撰者の性格を反映している。引用された資料は孫引きではなく、読書を通して輯めたものであるという。今は佚して無くなった貴重なもの多く、価値が高い。

(14) 白孔六帖 百卷 六帖 唐・白居易撰。後六帖 宋・孔傳撰

白居易の六帖（白氏經史事類または白氏六帖といった）三十卷に孔傳の後六帖三十卷を加えた六十卷を後に再編成して百卷にしたもの。

後六帖は孔氏六帖ともいい、阿部隆一氏の、中國訪書志の故宮博物院北平図書館宋金元版解題に宋乾道二年序刊の孔氏六帖三十卷（卷十一欠）の紹介があり、北京図書館の卷十一の零本と合わせて完帙となるという。白孔六帖が流布してからはあまり世に行われず、今は単行書は稀觀書となっているという。

後六帖の撰者孔傳は胡仔の苕溪漁隱叢話後集（中華書局）の本朝雜記下に引く復齋漫錄によると、東魯の孔傳、字は聖傳といい、先聖（孔子）の子孫で、中丞の道輔の孫である。博學多聞で、唐以来吾が宋の詩・頌・銘・贊・奇編・奥録を窮力討論し織芥のこさず、その樞要を撮り、區分彙聚し、世に益あり、唐の白居易の六帖に續けて、これを六帖新書と言ったという。苕溪漁隱の言によると、六帖新書は兵火のため、南北が隔絶され、江左（江蘇省等江東の地）に伝わらなかつたため、南宋の学者が増益聞見を獲られなかつたのを惜しんでいる。四庫提要によると孔傳を始めて称したのは玉海という。

書名は、白氏六帖に対して孔傳のものを六帖新書と称し、宋南渡後、白氏と孔氏を合して白孔六帖といったら

しい。明刊本に附す宋の韓駒の序には唐宋白孔六帖と題している。

その成立は韓駒によると、南宋の建炎(一一二七—一一三〇)から紹興(元年は一一三二年)の間に誰かの手で百卷に再編成したという。

この書は虞世南の北堂書鈔の系統を引いたものである。明嘉靖覆宋刊本には前記の韓駒序があり、総目録と各卷初に目がある。百卷を部は立てず、天・地・日・月以下千数十の小項目に分け、さらに子目を設け、要約した短い文とそれに注を双行に加える。出典は示さないことが多い。白氏六帖の部分は黒地に白抜きで「白」と記しはじめに置き、孔傳の方は同じく「孔」と記し区別する。本文の表記の形式は白氏六帖と全く同じである。

たとえば卷二十一は美丈夫、神彩儀容、醜丈夫、美婦人、醜婦人、長大人、短小人、形貌、富、の九項目があるが、各項目の下に子目が置かれている。美丈夫に例をとると、回彼美人兮難能、堂堂、冠玉、傅粉、遺帽、擲果、明珠・玉人、羊車、塵尾、龍章鳳姿、凝脂點漆、如瓠・白皙、閑麗、甚美、美豔、端正、彼姝者子、鄒忌之慕徐公、子游之稱張也、貌先五事、且高柴甚惡、子張難能、苟德行之無取、望其容貌使無慢易之心、漢相、目若懸珠・齒如編貝、若畫、美秀而文、父母遺德、連璧、堂堂田郎、回美鬢眉峻風厲、人物當世第一、美儀矩、美容、奇其風度、美容儀、美姿質、秀眉美鬢、容貌瓌偉、傅朱粉衣紈錦盛飾自喜、體貌偉麗、舉止秀時時謂玉而冠者、儀幹秀偉、姿幹瓌肚、人望而慕之、容止端秀、狀貌若畫と細分されており、回の若畫では「後漢馬援、眉目如畫」、回の狀貌若畫では「高儉狀貌若畫」の如く短く注記したもの、人物當世第一では「李揆美風儀、善奏對帝嘆曰、卿門地人物・文學當世第一、信朝廷羽儀乎、故時稱三絶」とやや長文の引用もある。

四庫提要は引用の誤り、出典の不明示、體裁の不統一等について諸家が非難しているのに対して、既に述べた

如く若溪漁隱叢話等の見解を紹介して好意的に評価している。

この書の注については、四庫提要が、玉海の引く中興書目の語として、「白居易は經傳百家の語を採つて、その英華を摘み、類をもつて門を分ち、ことごとく所出の卷帙名氏をその下に注した」という説や、晁公武の郡齋讀書志が説く如く、白居易の原本は出典となる書を記載せず、晁公武の曾祖父の秘閣公が、これに注をつけたものが世に行われているという説を引いて、晁公武が自ら家庭の事を述べているのであるから、誤りとも言い切れないとし、再び玉海の引く中興書目の説である、「白居易は天地のことをもつて門類を分ち、聲偶となして、出典を載せず」とした矛盾を指摘し、白氏原本が出典を注記していたものか、そうでないのか結論を保留している。

以上の説と現行明版白孔六帖と考え合わせると、白居易の白氏六帖には出典の本文は注記されていなかったか、あるいはわずかに注記されていたが、晁公武の曾祖父のような人が、注記を加え現行の宋本白氏六帖の形になり、孔傳の後六帖とを合わせるときにさらに、注記を加え現行の明版白孔六帖のような百卷本となったと考えるのが当を得ているのではなからうか。

現行の宋本白氏六帖を見ると注記は多く、現行白孔六帖の白氏の部分とほとんどかわらぬように見えるが、白孔六帖の白氏の部に白氏六帖にない注が加わっていることは比較してみれば容易にわかる。たとえば、日第三の白氏六帖の「日中則晨明 日晨之離 日居 月諸胡送而微詩 日晨月離」の部分では白孔六帖の白氏に欠けているのは困るが、詩は白孔六帖の誤りで、版を起すときに脱落したものであろう。日晨月離

は詩を欠落したのと同じ理由で、後人が白氏六帖に手を加えたものと考えられる。次に白孔六帖の白氏に易字が加えられているが、これは白氏と孔氏を合わせるときに加えられたと考えて支障なからう。

白氏と孔氏が合わせられたときの白氏六帖はすでに白氏六帖の原形ではなかったことだけは明かであろう。少くとも現行宋本の白氏六帖とほぼ同じものが使われ、これに増補が加えられ百巻となったと考えてよいと思われる。

白孔六帖の価値は注の本文の資料的価値は低いといえるが、必要とする故事、文例等が容易に見つけられること、太平御覽等に佚した記事が含まれているなど、第一資料に当る前の検索用としての利用に便である。

白氏六帖 事類集 三十巻は民國二十二年に吳興張氏用江安傅氏藏宋本の影印本があり、靜嘉堂文庫には北宋刊本が存する。この書の由来については陸心源の皕宋樓藏書志五十九に詳しい。白氏六帖は同じく同文庫に宋刊残本三十八巻が存し、陸心源の藏書志に見える。明刊本の白孔六帖は比較的多いが、影印本として明嘉靖間蘇州復宋本 (臺灣新興書局) がある。孔氏六帖は既に紹介した阿部氏の中國訪書誌に見える故宮博物館本と北京図書館本が存するのみである。

なお、宋の揚伯崑が白孔六帖に足りざるを増補した六帖補二十巻が四庫全書にある。

(15) 紺珠集 十三巻 撰者未詳。一説に南宋 朱勝非撰

この書を類書とするには問題がある。直齋書錄解題、宋史藝文志は小説類に、文淵閣書目、楊家駱氏の叢書子目類偏は類書類に、四庫提要は雜家類に入れている。類書は分類に困るとこの分類におしつけたこともあって、

はなはだあいまいである。

古く小説類としたのは穆天子傳、古今注等をいくらか類に分けて輯め、この中の故事類を要約引用しているからである。雑家としたのは諸書を無思想に集めたからである。類書としたのは北堂書鈔、白孔六帖等の編成の系統を継承しているからである。それぞれ、分類された理由はあがるが、小説類とするには小説以外のものも引かれており、雑家に入れるには淮南子等とは区別したいし、ここではやはり類書に分類したい。

撰者について晁公武の郡齋讀書志に、「紺珠集十三卷は皇朝宋の朱勝非が百家小説を編んで成るといい内容・體裁・卷数が現存流布している本と合致するので、紺珠集は朱勝非の撰とすべきであろうが、卷首に紹興丁巳(七年)の王宗哲の序があり、紺珠集はいつごろできたか知らない」といい、王宗哲が建陽詹寺丞に校勘出版せしめ世に広めたという点に疑問が起る。宋史列傳三六二の朱勝非の伝によると、この本の校刊の時は勝非存命中であり、いつごろできたか知らぬという王宗哲の論は理屈の上で疑わしい。撰者未詳のこの書を朱勝非に擬したものであろうか。

書名は郡齋讀書志によると張燕公(張說)に紺珠があつて、これを見ると事を記憶して忘れないという故事により命名したとされる。この故事により、後世の人が小説奇事を摘書したものを紺珠集というようになったという。

この書の成立の拠りどころはすでに引いた郡齋讀書志と紺珠集の王宗哲序である。讀書志の撰者晁公武は紹興(一一三一一一六二)の進士で王宗哲とは同時代の人であるが、宋淳熙中(九年以後刊一一八二一一八九) 袁州宜春 郡齋刊本(袁本という)の讀書志と、もう一本である衢本(紹興二十一年の自序がある)もいずれも王宗哲が序を書いた紹興七年(一一三七)以後のもので、晁公武は王宗哲序本を見ていそうなものであるが、讀書志では朱勝非編と



し、王宗哲は「紺珠之集不知起自何代」といつているのだから、晁公武は王宗哲の序を見ていなかったことにな  
る。この紺珠集が紹興七年以前に成立して、七年頃刊行されたと考えていいであろう。

その内容については四庫提要は「説部の書(論をなす書、小説類も含む)から抜き出し數語を摘録し、各条に分け  
件ちち繋いで類祭の用(詩文作製の参考用)に供したもので、體裁、内容が曾慥の類説に似ている。引書は類説の二  
百六十一種に比べ一百三十七種と少いが、その去取選擇が異りどちらか一方のみ廢すべきものではない。それに  
断片ではあるが古本も傳えている。内容は徵據とするものが亂雑で旁見側出するが、考證に資するに足るもの  
あり、摘録の語といつて譏るべきものでない」と評価している。その引用書を示そう。

(卷一) 穆天子傳、古今注、洞冥記、金樓子、趙后外伝、楊妃外傳、異聞實錄、開元天寶遺事、(卷二) 明皇雜錄、  
開天傳信記、神仙傳、續仙傳、商芸小說、書訣墨藪、南楚新聞、鄴侯家傳、(卷三) 抱樸子、朝野僉載、國史補、  
談藪、國史纂異、譚賓錄、尚書故實、(卷四) 伽藍記、杜陽編、雲溪友議、摭言、顏氏家訓、嶺表異錄、寶記、博  
物志、(卷五) 嘉話、因話錄、荆楚歲時記、明皇十七事、南部煙花記、宣室志、羯鼓錄、樂府雜錄、幽怪錄、十洲  
記、神異經、唐宋遺史、(卷六) 列仙伝、酉陽雜俎、北夢瑣言、(卷七) 水衡記、乾驥子、廬山記、文房四譜、廣州  
記、定命錄、鄴中記、法苑珠林、荊州記、瀟湘錄、北堂書鈔、成都記、河東記、啓顏錄、景龍文館記、御史臺記、  
三水小牘、淮南子、搜神記、呂氏春秋、論衡、原化記、廣異記、名書記、黃庭經、(卷八) 古樂府、樂府解題、夏  
小正、輶軒使者絕代語(方言)、劇譚錄、炙轂子、歷代書斷、拾遺記、大業雜記、(卷九) 古今詩話、古集歐陽公  
古今名賢集、襄陽耆舊傳、記聞譚、本事詩、山海經、三輔黃圖、盧氏雜説、述異記、漢武故事、北里志、(卷十)  
物類相感志、續齋諧記、隋唐嘉話、異聞集、封氏見聞記、眞誥、茶錄、幽閑鼓吹、火中遺事(令狐澄新羅國記附、柳

斑續十四、唐逸史、秦中歲時記、芝田錄、金鑾密記、傳記、金華子、(卷十一)松窓錄、蘇氏演義、翰林志、劉馮  
 事始、傳奇、甘澤謠、乘異記、青瑣高議、談苑、春明退朝錄、歸田錄、金波遺事、談助、麗情集、(卷十二)摭遺、  
 洞微志、青箱記、先公談錄、倦遊錄、資暇集、夢溪筆談、鷄跖集、書法苑、脞說、湘山集、國老閑談、玉堂閑話、  
 吉凶影響錄、幙府燕閑錄、言行錄、(卷十三)諸集拾異(この巻は諸集から拾遺したもの)。

その引用の形式は李玫の異聞實錄(卷一)に例をとると、長明公、妾換馬、甘棠館詩、竹葉舟、蜉蝣王漁紫石  
 の見出しをつけ、典拠となる本文が引かれるが、四字程度の短いものから十数行程度のものがある。たとえば、  
 楊妃外傳の玉環は楊妃小字と書かれるのみである。

刊本は宋紹興丁巳(七年一一三七)王宗哲序刊本。明天順庚辰(四年一一四六)賀榮及び天順七年存有居士榮  
 跋本(内閣文庫蔵。静嘉堂写本も同系。この書については阿部隆一氏の中國訪書志に解説あり)。王宗哲の序を有する影明  
 刊本(王雲五蔵本、臺灣商務印書館)等がある。

(16) 類説 六十卷 南宋・曾慥撰

曾慥の傳は宋史には見えぬが、明嘉靖舊鈔本類説の伯玉翁の「題類説目錄後」に慥、字は端伯、至淑子と号す。  
 魯公の裔孫である云々。また四庫提要にも、「…晉江の人、官は尚書郎直寶文閣に至る。祠を奉じ家居し、撰述  
 甚だ富む」といっている。嚴一萍氏の校訂類説の傳が最も詳しい。

書名は紹興六年(一一三六)四月望日の曾慥の自序に「自家の説を集め、事實を採摭し編纂して成書す。五十卷  
 に分ち名けて類説という」と言っているように、百家の小説類を集め、類に分け、これらに命名したものである。

類に分けるとは、たとえば卷三は列仙傳、續仙傳、王氏神仙傳、高道傳の如く、似た内容を類聚することである。卷数は舊鈔本は五十巻で、明天啓刊本以下の現行本は六十巻である。校訂類説の序で嚴一萍氏は初刻本の紹興六年の曾慥自序には「分五十巻」の語がなく、この時には宋本の残巻の篇次の不同から推して五十巻は完成してないで、四年後の紹興庚申（十年）麻沙書坊刻小字本（今傳本なし）によって全書（五十巻）となった。この頃には曾慥は生存中であり、曾慥の手で五十巻に分けたのではないかと嚴一萍氏は考えている。したがって、今見える曾慥自序は麻沙刻本に附されたものである。麻沙刻本は今傳本がないので、その系統の清の陸心源の皕宋樓藏本で、同じく陸心源の儀顧堂續跋卷十に引く「傳錄宋麻沙本類説跋」に、「新雕類説五十巻、：每巻目有り、篇目を連屬し、二百五十九種を采書し、拾遺總類（今本卷六十、舊鈔本卷五十）の采る所の四十余种はこれに与からず：版心に清思軒の三字あり、この書は紹興庚申に始めて建陽の麻沙で刊行されたもので字小にして刊不精」とあるによって考えるしかない。

この書の成立は四庫提要が、「銀峯にかりすまいしていた時に作ったもので、紹興六年（一一三六）に成る」とい、紹興六年序の初刻本は先に述べたように、五十巻に分巻される以前のものである。その後、麻沙刻本が紹興十年に刊行され、この段階で五十巻に分巻された。その後、麻沙刻本が誤り多く、そのため、宋の寶慶丙戌（二二年）二二二六の年に葉時が所蔵している旧本（紹興六年初刷本）では正して版を起したものが、後の明の嘉靖伯玉翁鈔本の原型とされている。この葉時本の鈔本は陸心源の皕宋樓藏本で、今は静嘉堂蔵の影宋鈔本であろう。以上が曾慥の手になった初刻本を曾慥あるいは別人の手で曾慥存命中に形をなした五十巻であり、明の天啓刊本以下の明刊本及び四庫全書本は増補が加えられた六十巻本である。

その内容は四庫提要で「漢以来の自家小説より、事実を採擷して編纂成書した」と述べているように、紺珠集に似た性質を持ち、四庫提要は雑家類に分類しているが、伯玉翁の「題類説目錄後」によれば、紺珠集と較べると、立言、命意に差別少ならず、引用も倍加している。紺珠集十三卷は朱僕射（采勝非）が一つ所で集めたものに、曾慥は広く集めていると称賛している。

引用書を列記することは省略するが、たとえば卷十九の吉凶影響録には「元長史」と「唐武后獄」の二題を引くが、唐武后獄では「黃靖國死。見冥中二數獄吏指一所云。此唐武后獄。后惡至大。方以大壘一貯蠶蝓一釐之。酷吏姦臣皆有獄」となっており、ほぼ、全卷この形式で統一されている。

既に散佚した書も多く、看過すべきでない価値ある書も含まれている。また紺珠集の引用書と書名が重複するものも多く、比較研究してみる価値も有する。

その伝本は紹興六年曾慥序初刻本の残本一冊（仇池筆記、隱齋閑覽、東軒雜錄）北京文学古籍刊行社影印、又、校訂類説所収。宋紹興庚申（十年）麻沙書坊刻小字本五十卷（傳本なし）。清陸心源陌宋樓藏清思軒抄本。宋寶慶丙戌（二年）葉時刊本、陸心源旧藏葉（時）刻鈔本、静嘉堂藏。明嘉靖伯玉翁旧鈔本。明天啓六年新野知縣岳鍾秀刊本、内閣文庫藏。又、北京文学古籍刊行社影印本。校訂類説、嚴一萍校訂、明天啓六年刊本と嘉靖伯玉翁旧鈔本の合訂本、附宋殘本（臺灣藝文印書館）。

(17) 皇朝事實類苑 七十八卷 南宋・江少虞撰

この書の分類については諸書意見が分かれるが、直齋書錄解題、文獻通考、宋史（類事類）等は類書とし、四庫

提要は雜家類としているが、ここでは類書としておこう。

江少虞の傳は四庫提要では始末未詳とするが、董康本の影印本で梅原郁氏が、「虞中というアザナを持ち、常山(浙江省)の人、北宋の末、政和八年(一一一八)に進士に合格し、浙江省天台縣の学官をふりだしたに、延・饒・吉各州の知事を歴任した程度のこと以外はわからぬ」としている。嘉錫氏は四庫提要辨証で、萬姓統譜卷三を引いて考証しているが、あまりはつきりしない。

その書名ははじめ皇宋事實類苑(江少虞自序)といったが皇朝事實類苑(直齋書錄解題、玉海、宋史、事實類苑(四庫提要)、皇朝類苑(元和古活字本)、宋朝類要(萬姓統譜)等の呼称がある。

卷数も二十六卷(直齋書錄解題、玉海、宋史、四十卷(王士禎居易錄)、六十三卷(四庫提要)、七十八卷(元和古活字本、董康本)とさまざまであるが、もと二十六卷であったものが増補されて七十八卷になったものか、二十六卷は省略本で足本はもとから七十八卷であったか断定しにくい。

その成立は江少虞の自序により紹興十五年(一一四五)に書成り、紹興癸酉(二十三年)一一五三)は麻沙の書肆から新雕皇朝類苑七十八卷が刊行された。これが元和古活字本の底本である。

その内容は序によると、典故沿革、詩歌賦詠、文章四六、曠達隱逸、仙釋僧道、休祥夢兆、占相醫藥、書畫伎藝、忠考節義、將帥才略、知人薦舉、廣知博識、風俗雜誌、談諧戲謔、神異幽怪、詐妄謬誤、安邊禦寇について二十八門七十八卷に編成している。四庫提要によると、「宋代の朝野の事跡で、諸家の記録に見えるものが多いが、散乱して稽り考え難いので、これを選択分類配列して二十二(門)にし、四字をもって標題とした」という。二十二(門)は二十八(門)の誤りで、四庫所収本は不全本と考えられる。四字の標題とは、祖宗聖訓、君臣知

遇、名臣事迹、德量知識、顧問奏對、忠言議論、典禮音律、官政治績、衣冠盛事、官職儀制、詞翰書籍のほか、序に引かれてゐる典故沿革以下十七門計二十八門をいう。各門の下に小項目が設けられ二千二百に達するという。また、引く所の書は類をもつて相従い、原文を全録し、増損を加えず、各々書名をもつて条下に注す。共に六十余家、十四年完成したものだから徵採極めて浩博であり、北宋一代の遺文逸事をほほ具えているという。一例を示そう。

卷六十八 神異幽怪 龍卵

天聖中。近輔獻龍卵云得自大河中。詔遣中人送潤州金山寺。是歲大水。金山廬舍爲水所飄。者數十間。人皆以爲龍卵所致。至今匱藏。予屢見之。形類色理。都是雞卵。大若三五升囊。舉之至輕。惟空殼耳筆談

右は夢溪筆談卷二十、神奇に見えるが、これを古迂陳氏家藏夢溪筆談（元刊）と対比すると一部元刊本に誤字と認められるものはあるが、ほとんど異同がない。

刊本は麻沙新雕皇朝事實類苑とその複製本である元和七年古活字新雕皇朝類苑及び元和古活字による民国武進董氏仿宋刊本（影印本あり、中文出版社）があり、鈔本として陸心源舊藏靜嘉堂藏舊鈔本六十三卷及び四庫全書所収本がある。

(18) 錦繡萬花谷 前集四十卷、後集四十卷、續集四十卷 南宋・撰者未詳

撰者について四庫提要は不著撰人名氏とし、自序に淳熙十五年（一一八八）十月一日とあることから、宋の孝宗

の時の人であろうとする。また、前集末に附載する衢州盧襄の西征記から推して衢の人かとする。

書名は自序によると烏江の蕭恭父、河南の胡恪が命名したという。

成立は自序の淳熙十五年十一月一日。

この書の明嘉靖丙申（十五年）二五三六）跋本によると、宋淳熙十五年十月一日自序。明嘉靖丙申秦汴考證。嘉靖丙申張愷跋がある。自序に古人の文集、佛老異書、百家傳記、醫技、稗官、齊諧小説、荒錄怪志に至るまで、聞けば必ず求め、求めれば必ず覽た。これに唐人及び国家（宋）諸公の詩を加え、三集とし、每集四十卷としたという。また、別集と称するものがあるが、これは考證にも言うように別人の撰である。四庫提要によると前集二百四十二類、後集三百二十六類、續集一卷から十四卷まで四十六類、十五卷から四十卷まで皆馮類姓（百姓）である。直齋書錄解題は門類に倫理なく、序文もまた拙しと評して確かに雑なところも多いが、散佚した書及宋代の逸書類を多く輯めていて価値が高い。

また四庫提要が指摘するように淳熙中（一一七四—一一八九）の撰であるのに、紀年類（前集卷九、陵廟紀年大宋、今上）に理宗の紹定（一一三二—一一三三）、端平（一一三三—一一三六）の年号を載せ、帝后誕節類（前集卷四十、聖明、寧宗及び今上）に寧宗の瑞慶節、理宗の天基節の名をあげ、理宗を今上としているのは、当時の書肆がすでに附益したもので淳熙の原本ではないとする。

刊本間の異同も調査する必要がある。たとえば長澤規矩也著函解図書学に會通館印正錦繡萬花谷の書影があり、この部分は卷十九、夔州路、夔州に当り、嘉靖刊本では續集卷十二、夔州路、夔州に当るが、内容はほとんど一致しない。したがって使用に当って特に注意を要する。

刊本は宋刊本の零本が静嘉堂文庫（卷十一、十二）、書陵部（卷三千九・四十）にある。明弘治七年（二四九四）會通館銅活字本（内閣文庫藏、缺本あり）、明嘉靖十五序刊本（書陵部、内閣文庫等、臺灣新興書局影印本あり）等がある。

(19) 事文類聚 前集六十卷、後集五十卷、續集二十八卷、別集三十二卷、新集三十六卷、外集十五卷、遺

集十五卷 前集、別集、南宋・祝穆撰。新集・外集、元・富大用撰。遺集、元・祝淵撰。

この書について四庫提要に次のように述べられている。「この書は元代の麻沙版である。前・後・續・別の四集は皆宋の祝穆の撰、新集外集は元の富大用の撰、遺集は元の祝淵の撰である。それを合わせて一編としたのは何人より始ったか知らない、おそらく建陽の書賣のなせるものであろう。祝穆に方輿勝覽の著あり、已に著録す（史部・地理類所収。祝穆は字を和甫といい、建陽の人である。穆の少名は丙で、弟の癸と同じく業を朱子に受けた。この書（事文類聚）の後集第十卷に呂午（呂伯可）の跋祝公遺事後一首があり、祝穆の事蹟を載せて尤も詳しい。富大用は字を時可といい、何れの人か知れない。祝淵は古賦辨體を作った祝淵と名姓並に同じである。その書中に載せる制度・沿革はともに元初に至って止む。時代また相符合している。しかしてかの祝淵、字は君澤であつてこの祝淵、字は宗禮である。すなわちはつきりと違つており、おそらくその名姓がたまたま同じで、実は同一人ではないのである。前集の首に、淳祐丙午（六年一一二四六）の年の祝穆の自序がある。每集を各々総部に分ち、附するに子目を以つてしている。条列・件繫すこぶる賅備である。類ごとに羣書要語で始まり、ついで古今事実、さらに古今文集となつてゐる。蓋うに藝文類聚、初學記スズキの體スタイルを沿用してゐながら、ほほ例を変えてゐる。そのうち『雙南金』（二倍の価値ある南金）のように初めて張載の擬四愁詩に見え、再び杜甫の詩に見えるのであるが、



この書ではその下に注して淮南子といているが、淮南子にはその文はない。また、羅鄴の詠草詩に閭門要路一時生の句があるが、この書では譌して侯門要路一時生とするのもまた明人の葉盛の水東日記の譌るところである。蓋し、輾転販鬻ころがしひきましているうちにその本始より迷あやまつてしまい、前人の精審に及ばない。しかしして錦繡萬花谷の類で古人の著作を収めているものは、たいてい刪摘され不完全であるが、ひとりこの書の載せるところは必ず全文を挙げている。故に前賢の遺佚の篇で、藉もとはつているものがあるが、この書によって微あきらかにするに足るものがある。東哲の餅賦の如きは張溥の漢魏六朝百三家集にわずかに教語を採っているが、この書にはその文を備載している。これもまた、体・裁の善いところである。この書は宋代の類書の中に在って、もとよりなお検閲に資すべき価値のあるものである。新集・外集・遺集はひとしく祝穆の書をふまえて作られている。ただし、その門類の祝穆の書（前四集をさす）に足らざるを補い、体例は一つとして更えるところがない。ややその採引が雜糅で原本に及ばないのを嫌にくむ。しかしして元代に作られたので、古籍は多く存在しており、類を連ねてこれを収めているので、参考に備えることができる。ただ、祝穆の書は淳祐年間に成ったのに、書中に理宗の廟号を称するものがあるのはほとんど富大用等が迫って改めたところがあるのであって、ことごとく原文ではない。これは古書を竄乱する開明の人（近代人）の悪習で憎むべきものである」と言っている。この四庫提要の説くところによりはほ書の姿をつかむとすることができる。

その書名は郡齋讀書志には事文類聚六十卷となっており、原本はこの呼称であったと考えられるが、後に富大用、祝淵の書を加えるにあたり、古今事文類聚となつたのであろう。今見られる刊本は新編の語を冠するが、元刊本は新集、遺集を欠き（遺集のみ欠くものもある）、明萬曆丁未刊本（宋・元の旧板という）は遺集を収めないので、

書の命名事情も推察できる。

刊本として元の泰定三年、武溪書院刊（遺集なし内閣文庫蔵）。明萬曆甲辰（三十二年〇一六〇四）序、金谿唐氏重刊德壽堂刊（和刻本の寛文六年刊本の底本。遺集あり、内閣文庫等蔵）。明萬曆丁未（三十五年〇一六〇七）安正書堂刊（遺集なし内閣文庫蔵）。明内府刊大本（明經廠刊本、遺集なし、内閣文庫蔵）。明刊翻印本、建陽知縣鄒可張訂刻本。その他元和古活字本（遺集なし）もある。

右のうち、唐氏重刊本とその翻印本である鄒可張本が最も多く流布し、また、日本では和刻本が出て多く利用されている。なお、誰の手になったか不明であるが、要約本の新編古今事類全書が作られ、和刻本として、延宝・貞享の刊本がある。また、元の劉応季という人物が、新編事文類聚翰墨全書（大全とするものあり）を著わした。この書は事文類聚の体裁をまねて、尺牘の用語故事文例書式の類を集めたもので、中国はもとより、日本でもおおいに利用された。

(20) 記纂淵海 百卷 南宋・潘自牧撰

この書はもと一九五卷あり、現行の明萬曆己卯（七年〇一五七九）百卷本は後人の改竄を経たものという。四庫全書總目提要補正の引く瞿氏目録によると宋刊本二百九十五卷、金華潘自牧編と題し、前に自序がある（萬曆刊本なし）。その編成は、論議・性行・識見・人倫・人道・人情・人事・人已・物理・敘述・接物・問學・言語・政事・名譽・著述・生理・喪紀・兵戎・釋・仙道・闕儀の各部で、毎部に子目があり、すべて千二百四十六門であるという。この書の特徴は纂言（ことばを集めたもの）に詳しく、紀事を主としていないところが、他の類書と

異なる。

萬曆刊本の編成を見ると、萬曆己卯孟夏吉旦、陳文燧序。萬曆己卯中秋日、胡維新敘。刻記纂淵海名氏。目錄の順序になっている。目錄を見ると、混元・五行・天文・歲時・節序・測候・律歷・祥瑞・災異・地理・居處・郡縣・職官・仕宦・科舉・學校・人倫・人道・性行・識見・論議・問學・言語・政事・名譽・物理・人己・接物・敘述・人事・人情・著述・祭祀・禮儀・樂・喪紀・兵戎・闔儀・字學・文卷・襟懷・民業・釋・仙道・伎術・博奕・雜戲・飲食・香藥・果食・花卉・草・木・竹・禽・獸・水族・蟲豸の各部となっている。

四庫全書には百卷本が収められ、当然、宋版の原型を失したものになっている。

この書の撰者、潘自牧は四庫提要によると、「浙江通志に潘自牧は金華の人で慶元元年の進士である。官は龍游の令である。此の本では教授と言っている。蓋しその書を著わした時の官であろう」といっている。

萬曆己卯刊本は原本の姿を失っているのであるが、四庫提要は「陳禹謨が北堂書鈔を改變したように、萬曆刊本は潘自牧の舊(本)に非ざるなり、また、陳文燧の序にその先世にこれを閩蜀に求め、その前編を得、吳越を周流してまた後編を購ったと稱している。この本は前後の編を分けていず、前編・後編の合併を経て益々その真を失ったものである」という。

書名について陳文燧序に、「潘自牧氏、性すでに古學を嗜み、また源を遡り、思を研め、力を殫して全書を彙集し、命名して記纂淵海といった」という。

その成立については胡玉縉が四庫全書總目提要補正で、「原序に部は二十二たり、門一千二百四十六たり、合わせて一百九十五卷、總て八十萬言等の語あり、末に嘉定己巳(二年)二〇九)九月朔、從事郎新差充福州學教

授潘自牧序と有る」という。したがって、寧宗の嘉定二年ごろ刊行されたと考えられる。

刊本は増訂四庫簡目標注によると、季目（清・季振官編、季滄葦藏書目か）に宋刊本一九五卷があり、天一閣目、許氏目に舊鈔本一九五卷がある。浙采遺目（清・沈初等編浙江採集遺書總錄十集附聞集か）にも一九五卷とあり、卷末に（元）泰定乙丑（二年）一三二五 圓沙書院刊行とある本がある。今百卷本と称するものは萬曆己卯陳文燧刊本で最も普通に見られるもので、影印本（臺灣新興書局）がある。

(21) 全芳備祖 前集二十七卷、後集三十一卷 南宋・陳景沂撰

四庫提要によると「陳景沂は肥遯と号す。天台の人である。仕官・履歴は未詳である。この書の前に理宗の寶祐元年（一二五三）の韓境の序がある。序の言うところによると、この書は理宗の時に朝廷に進上されたというが、そのことについて考えるべきでなくてもない。凡そ前集二十七卷・記すところ皆花である。後集第一卷より八卷（補正によると九卷とすべきである）に至るまでを果部となし、十卷から十二卷に至るまでを卉部となし、十三卷を草部となし、十四卷より十九卷に至るまでを木部となし、二十卷より二十二卷に至るまでを農桑部となし、二十三卷より二十七卷に至るまでを蔬部となし、二十八卷より三十一卷に至るまでを藥部となす。その體裁は一物ごとに事實祖、賦詠祖の二類に分っている。蓋し藝文類聚の體に仿っているのであろうか、事實祖中を碎録、紀要、雜著の三子目に分ち、賦詠祖中、五言散句、七言散句、五言散聯、七言散聯、五言古詩、七言古詩、五言八句、七言八句、五言絶句、七言絶句の十子目に分たれる。比較的理路整然としており、明の王象晉の羣芳譜はこの書を藍本としている。唐以前の事實、賦詠、記録は数少いが、北宋以後のものはよく整備している。しかも南宋の

ものは尤も詳しい。この書には多く他の書物に載せないものがある。その本集がすでに佚したものに及んでは、考証の資とすべきものがある」という。四庫提要補正によると、「勞氏碎金卷中にこの書の鈔校本があり、江淮肥遯愚一子陳景沂の編輯、建安の祝穆訂正と題している。清の勞權がいうには後集卷二十二、二十七に錦繡萬花谷を引いているから、提要の説は的らない。韓境の序によれば、この書は萬花谷(淳熙中へ一七四—一八九)撰の後に出了。陸氏(甯宋樓)藏書志に舊鈔本があるが、寶祐丙辰(四年一二五六)の自序を載せていて、まだ江淮肥遯愚一子とは称していないので、肥遯はその号ではないのではなからうか」といつている。

増訂四庫簡目標注によれば刊本なしと称しているが、書陵部に宋版零本がある。伝えられた多くのものは鈔本で、靜嘉堂文庫等に蔵されている。

(2) 山堂先生羣書考索 前集六十六卷 後集六十五卷 續集五十六卷 別集二十五卷 南宋・章如愚撰

如愚は四庫提要によると「字は俊郷、婺州金華の人である。慶元中に進士の第に登り、初め國子博士を授けられ、貴州の知に改められた。開禧の初めに召され、時政を疏陳し、韓侂胄にきらわれ罷めさせられて帰国した。事蹟は宋史儒林傳にくわしい。宋史に文集があつて世に行われていと称しているが、すでに散佚して、ただこの書のみ猶存している」といつている。

この書の名称は陸心源の甯宋樓藏書志によると山堂先生羣書考索といひ、元の延祐庚申(七年一二三〇)圓沙書院新刊の本で山堂宮講章如愚俊脚編となつてゐる。同藏書志には明正徳戊寅慎獨書齋刊の本があり、羣書考索という書名になつてゐる。こちらは撰者を山堂先生章俊脚編輯となつており、いずれも靜嘉堂に蔵す。四庫提要

は山堂考索（鄭京序中に見える）としており、三つの呼称を有することになる。

その成立はいつか明確ではないが、慶元中（一一九五—一二〇〇）の進士、開禧（一二〇五—一二〇七）のころ官を罷めさせられていることから判断して隱居のつれづれに編集したものではなからうか。

その内容と評価については四庫提要に次のように述べている。「凡て四集に分かたれ、前集六十六卷は六經、諸子百家、諸史、聖翰、書目、文章、禮樂、律呂、歷數、天文、地理の十三に分かれ、後集六十五卷は官制、學制、貢舉、兵制、食貨、財用、刑法の七門に分かれ、續集五十六卷は經籍、諸史、文章、翰墨、律歷、五行、禮樂、封建、官制、兵制、財用、諸路、君道、臣道、聖賢の十五門に分かれ、別集二十五卷は圖書經籍、諸史、文章、律歷、人臣、經藝、財用、兵制、四裔、邊防の十一門に分たる。宋の南渡以後、通儒（博學で萬事に通じた學者）は性命を尊び事功を薄かろんじた。文士は議論を尊び、考證は尠すくない。如愚のこの編のごときは独り考索をもつて名となし、言に必ず微あり、事に必ず拠あり、諸家（の書）を博採し、折衷するに己の意をもつてした。いたずらにとどこおるところなく、掌故に通じる。またすこぶる經世をもつて心としている。講學の家に在つて、尙實際あり、ただその書卷帙が浩繁である。また四集は一時に作られなかつたので、重複牴牾のところあるを免れない。前集の如く六經門の外に諸經一門を立てているが、その文はたがいに入りがあつた。諸子百家門中では晏子、荀子、揚子、文中子の類を諸子とし、管子、商子、韓非子、淮南子の類を百家とする。それが何を根拠として分別したのか知れない。また前集の第三十五卷の如く六宗の説を詳しく列挙しているだけで、それに専ら従うわけでもない。續集第十卷は鄭康成の説を主としている。前集第三十卷はすでに三年一禘、五年一禘を主とし、もつて宋の制が古に合つてしているとす。別集第十四卷はまた専ら顔達龍の三年一禘、五年一禘の説を主とし、前集第三

十三卷は鄭康成の説の裕大禘小を主とす。別集第十四卷はまた専ら顔達龍説の禘大禘小を主とす。前集第三十八卷は既に天子五門、諸侯三門を主とするが、別集第八卷はまた天子六門、諸侯二門と謂う。皆前後低轄し、抉擇に於て疎かである。けれども、諸説を網羅し繁富であり、考拠にも、また心に得るところ多く、宋人の著述の中にあつて、通考と較べると體例やや雑とはいへ、釋經に優れている。玉海に較べて博さには及ばないが、時政に於ては詳しい。黃氏日鈔に較べると條目が明らかであり、呂氏制度詳説に較べると源流が備つている。前人、蘇軾の詩を、武庫の兵のごとく利鈍互に陳ぶと稱しているが、如愚のこの編もまた、このように目すべきものである」と評価している。

四庫提要補正で胡玉縉は「陸心源の儀顧堂續跋の元槧山堂攷索跋を引いて、明正徳戊辰劉洪慎獨齋刊本と元槧本を勘合すると劉本は刪削し移し易えたところがあり、元槧本こそ初刊の祖本である。提要の拠つたのは(善本でない)劉本であろう」とする。刊本については既に述べたので省略する。

(23) 古今合璧事類備要前集六十九卷 後集八十一卷 續集五十六卷 南宋・謝維新撰別集二十五卷 南

宋・虞載撰

謝維新は四庫提要に「字は去咎、建安の人である。その始末は未詳である。自署して膠庠進士といっているから太學生であろう」とする。別集の撰者虞載については何も説かれていない。

この書は自序によると理宗の寶祐丁巳(五年一一二五七)に成つた。明嘉靖丙辰衢州夏氏刊本には嘉靖丙辰の顧可學の重刊合璧事類序、黃叔度の合璧事類跋、謝維新の合璧事類序、原刊者刊記等が見える。自序によると、友

人の劉德亨の話に應じて作ったと称している。総目の後に刊記があつて、「以前古今備要四集を刊行したところ、世に盛んに行われた。但し門目未だ備わらず、再刊の時に外集を補った。その未だ備わらぬ州郡等の門はすでに方輿勝覽に見えるので、ここにまた載せず」と言っている。四庫提要はこの文の筆者を劉德亨と考えている。

四庫提要によると、「この書の前集は四十一門、子目四百九十一、後集四十八門、子目四百一十六、その中致仕の一目は録が有つて書はない、注にすでに前集に見えるという。續集は六門に分ち、子目五百七十、別集は六門に分ち子目四百一十、外集十六門に分ち、子目四百三十、引くところ最も詳悉である。ただ、郡縣山川名勝は祝穆の方輿勝覽にすでに備わっているので、改めて載せるに及ばない。毎目のはじめを事類とし、後を詩集とする。収めているものは宋代に及ぶ。太平御覽、冊府元龜の諸書に及ばずとはいへ、皆根柢は古籍で、もともと採究するところ皆宋以前の書で、多くは今日見ることのできぬものである。宋代の遺事、佚詩で、蘇軾の詠雪詩の如く富貴勢力でもつて四首に分つており、本書に録せざるものでまた往往この書に見えるものがある。故に厲鶚は宋詩紀事を作るときに多くこれを採用した。また宋代の官制は至つて穴雜であり、宋史にわずかにその名を存するのみである。当時の詩文の称するところの多くは、今何れの官と為すのか知られないものがある。ただこの書の後集には、それを條列しており、最も明白である。もつとも考證に資すべきものであり、類書の中でも取つて材とするに足るものがある」といつている。この條列というのはたとえば後集卷一の君道門に聖翰という目があるが、この始めに古今源流以下伏羲から我朝に至るまでの聖翰に関する紀事が見えることをいう。

刊本として増訂四庫簡目標注によると宋寶祐丁巳（五年一一二五七）刊本の前集・別集の殘本が李木齋にあるという。明刊として「嘉靖壬子春正月、三衢近峯夏相、宋板摹刻至丙辰冬十月事竣」と刊記にある刊本（嘉靖丙辰



衢州夏氏刊本、臺灣新興書局影印本あり)と明嘉靖丙辰錫山秦氏刊本があり、弘治戊午錫山華氏刊本の前集があると  
いう。

(24) 源流至論 前集十卷 後集十卷 續集十卷 南宋・林嗣撰。別集十卷 南宋・黃履翁撰

四庫提要によると「林嗣は字を德頌といい、寧徳(福建省羅源縣、五代の閩)の人である。かつて易をもって郷試に最優等で合格した。事蹟は閩書に具さである」という。閩書が何喬遠撰の明崇禎四年序刊本を指すのか、黃仲昭撰、弘治四年序刊八閩通志を指すのか確認していない。黃履翁については提要は、「字は吉父、その里貫を知らず、疑うらくはまた閩(福建の古名)人か」という。四庫提要補正によると「丁氏藏書志に元の大徳丁未本あり、張氏及び陸氏藏書志に元の延祐丁巳本があつて、その別集にはともに前進士三山(福建省城中の山名。九仙、閩山、越王の三山)黃履翁古父編と題しており、嘉熙丁酉(元年1133)の自序にも同じくこの称をなしているので、閩人であることには疑いなし」とする。陸氏儀顧堂題跋の引く源流至論別集跋には、「履翁は福建寧徳縣の人で、紹定五年(1133)の進士で、林垞所輯の源流至論がまだ備わらざるをもって彙輯して別卷十卷をつくつたことが閩書に見ゆ」といっている。同じく補正は瞿氏目錄を引いて、「元刊本があり、それに云うには吉父(黃履翁)と德頌(林嗣)は同じく三山の人で、また、時を同じくす。故にすでにその書に序して、また補つて別表を作つた。明刊本は前集と續集の順序が逆になっており、かつ太極論の前に太極圖及び朱子の太極圖解を増補しており、原本の舊を失っている」といっている。

四庫提要はこの書を評価して、「宋は神宗より詩賦を罷め、策論をもって士を取ることにしたので、古今の

例を博く綜べ集め、典制の相尚ぶべきものを参考にしたが、その浩瀚でにわかには窮められないのに苦しんだ。ここにおいて類事の家（類書の撰者）では往往諸例を順序よくならべ、連続させ、著して成書し、試験場の答案用に供した。その時、麻沙書坊では刊本が最も多かった。たいてい郷塾の陋儒より出たもので、他人の言論文章を盗みつらねた、とるに足らぬものが多い。ただ章俊卿の山堂羣書考索は最も精博であり、この編は經史百家の異同、歷代制度の沿革、条列（條理をつけて配列すること）、件繫すじづまりに於て要点を得ている。源流至論は専ら科擧のために設けられたものであるが、宋一代の朝章國典を分門類別し、序述詳明であり、多く諸書に載せないものがある。実に考證家が取って資とするところのものであり、体例が近俗であることをもって廃すべき書ではない」と評価している。

刊本として、宋嘉熙丁酉（元年〱一二三七）刊本。元延祐丁巳（四年〱一二二七）孟冬圓沙書院刊本。明嘉靖刊本（尊經閣藏）。弘治二年梅隱書堂刊本（京大人文研藏）。萬曆十八年書林宗文堂鄭氏雲齋刊本（京大人文研、内閣文庫藏）等がある。

(25) 玉海 二百卷 附辭學指南 南宋・王應麟撰

四庫提要の周易鄭康成註の解題によると、「王應麟は字を伯厚といい、慶元の人である。自ら浚儀と署（浚儀王應麟伯厚甫と署名）したのは、祖先の籍によるのではなからうか、淳祐元年（一二四二）の進士、寶祐四年（一二五六）中博學鴻詞科に復した。官は禮部尚書兼給事中に至る」といつている。事蹟は宋史儒林傳に見えるが、影印本の合璧本玉海に附す清の錢大昕の深寧先生年譜及び清の陳僅と清の張恕の同書名の王深寧先生年譜が詳細で

ある。

四庫提要は次のように言っている。「この書は天文、律歷、地理、帝學、聖文、藝文、詔令、禮儀、車服、器用、郊祀、音樂、學校、選舉、官制、兵制、朝貢、宮室、食貨、兵捷、祥瑞の二十一門に分かれたれ、毎門各子目に分かち、凡そ二百四十余類ある。宋は哲宗の紹聖より宏詞科を置き、徽宗の大觀に詞學兼茂科に改められ、高宗の紹興に至つて定めて博學宏詞の名となし、重ねて試格を立てた。ここに於て南宋一代、通儒碩學は多くこれより出で、最も人を得たりと號している。しかして中でも應麟はもっとも博洽である。そのこの書を作つたのは、すなわち詞科に應用するためにこしらへたものである。だから條目をつらねならべ、鉅典鴻章を率めてゐる。その故實の採録したものはみな吉祥善事であり、他の類書と體例がとりわけ殊つてゐる。しかして、經史子集、百家傳記より引かれたものは、そなわ咳り具りぬものなく、宋一代の掌故である。この書に率める諸實錄、國史、日歴は、後の史志の未詳とするところもつとも多く、その貫串輿博ぶりは唐宋の諸々の大類書の中でいまだよくこれに過ぎるものはない。清の何焯がややもすると應麟の困學紀聞を評點(校訂困學紀聞三箋)して詞科の書なるをもつて應麟を誣り、特に大言をなす故に信ずるに足らぬとしてゐる。この玉海は元の時にかつて慶元路で刊行され、版は久しく佚してゐた。今、江寧に南京國子監刊本があり、應麟の著わした詩考、詩地理考、漢藝文志考、通鑑地理通釋、王會篇解、漢制考、踐阡篇解、急就篇解、小學紺珠、姓氏急就篇、周易鄭註、六經天文編、通鑑答問等書を附して後に上梓した。明の貝瓊の清江集を案ずるに、應麟の孫の王厚(王厚孤が正しい)の作つた應麟の墓誌があり、『玉海を著わし、未だ脱稿せずして失い、後復たこれを得たが、闕誤多く、王厚は考究編次し闕師(將軍)に請い出版し、他書十二種とあわせて傳えた』と稱してゐる。これによると、諸書の附梓は實に元代に始

る。ただ貝瓊は慶元の初めにこれを刻した時、書を十二種附したと称するが、今は十三種である。慶元刊書の原序にはまた郡學で出版された公書は凡そ十四、玉海はその一つで、十三種は誤りではない、あるいは清江集の伝写の譌かとする。また、巻首に、浙東道宣慰司の刊書牒文を載せ、玉海は実に二百卷と称するが、今本は辭學指南を合わせて二百四卷とする。婺郡文學李桓の序に、列するところの卷目はすでに今と同じである。これはおそらく当時の校刊者の附入したものではなからうか。このようにすること久しく、今日に及んでいる。應麟の他の書の附刻に至っては、各各その類に従い別に著録する。そもそも玉海とはもと張融の集につけられた名で、実は梁の武帝所集の金海にならったもので、その称を変えたものである。」と。

玉海の成立事情、編成については四庫提要補正に「陸氏藏書志（韻宋樓）に元刊本があり、牒文及び各序ならびに厚（應麟）の孫の跋を載せていて、詳しく玉海が失せてまた得たこと及び詩考等諸書を刊行、今これを数えろと凡十三種と敍べているが、これは貝瓊がいう墓誌はこれに本づいており、二（十二）は蓋し三（十三）の誤りであろう。應麟の孫の名は厚孫で提要は厚の下の孫の字を脱している。陸心源の儀顧堂續跋にいう『元の順宗至元三年（一二三三七）、乞里不花は浙東道の宣慰使となり、國子學博士趙承徳の願い出により、慶元路學に於て刊行し、元の順宗至正九年（一二四九）、阿股圖が総管となり、六万字を修補し、始めて完書と成った。明の初め、版本は南京國子監に帰し、明の武宗正徳元年（一五〇六）に五十余版欠け、二年に、二百余版欠け、続修して明の神宗の萬曆（一五七三—一六一九）に至り止めた時には元刊は十に一も存していなかった。その存するものも多くは模糊（つぎはぎだらけ）多く、弁別（元版と補習の）能わすの状態であった。また二百余の欠葉はいまだ補完されておらず、清の高宗の乾隆中（一七三六—一七九五）に康基田が江寧の布政司使となり、萬曆本を重刊した時も、欠葉

はもとのままであった。この本(陸心源本)は元刊元印で欠葉は一つもなく、杭州書局が重刻し、姚蓮槎が甯宋樓本と対校して三百年後に復び完書を見た。信頼できるものはこれあるのみ』。といい、胡玉縉は今人皆萬曆の康基田本を重んじ、浙本を忽にしているのどこに記録しておいたと言っている。

刊本として、元至元三年(一三三七)慶元路儒學刊本附十三種。元至正十二年(一三五二)慶元路阿 殷圖塾堂刊本(京都建仁寺兩足院藏本及び靜嘉堂藏舊陸心源甯宋樓藏本による影印本あり。中文出版社)。元刊明修清康熙補刊、浙江書局本。清康基田校刊本等。

(26) 小學紺珠 十卷 南宋・王應麟撰

この書は玉海に附されているので、諸本はそれに準ずるが、刊本の種類は玉海より多い。和刻本も、文政十年(一八一七)江戸尚友堂刊本、同影印本(汲古書院)、と同年刊有栖川宮家藏版大坂河内屋喜兵衛元本がある。いずれも小型本である。

この書について四庫提要は「門に分ち、故事を列べるところは諸類書と同じであるが、門ごとに數をもつて綱とし、統べるところの目をもって下に繫いで行くところが他の類書と異っている。蓋し世に伝える陶潛四八目の例にならい、數の目をもって故實を分門配列したのである。」といっている。これを本文に沿って説明すると、卷一の天道類(部)では兩儀、三才、四丈、三無、九天、五天帝等の門を設け、兩儀の子目に天地を置き、その下に雙行に出典を注記している。その目はすべて名數をもつてして、初学者の記憶に便利なようにしている。陶潛の四八目とは、王應麟の自序にいうように陶潛の聖賢羣輔錄のとつた方法をいう。提要はさらに言う「律歷

類の如きは首に六律・六呂とつづけ、度量權衡に至っている。次いで四時・八正（八節）、二氣・十二月の類につづく。蓋し律に由り、歴に及んでるのである。しかしてその後また五音、六十四聲、八十四調とつづけ、その後また七閏、八會の類をつづけており、前後殊に條理がない。また、五卜、三兆、四兆、九筮の類の如く、應麟の玉海ではこれを藝術に系つらねており、この書では律歴に收入しているのもまた自らその例を亂しているのである。まま採摭いまだ備らず、耳目の前に失っているものがある。天文類（地理類？）中の如くすでに淮南天文訓の八絃八極（四維に引く）を載せていながら東西南北中の五官、子午丑未寅申卯酉辰戌巳亥の六府は記録されていない。器用類中、周官の八尊を載せて（周官の）賈疏（疏云としながら注を引いていない）の十六尊は記録されていない。すでに春秋傳の禘飫宴の三蒸（禮）を載せていながら儀禮疏の牲に二十一體ありを記録されていない。かくの如きの類は一一述べなくてもこと足りる。閻若璩の潛邱劄記がわずかにその九經を摘出して唐宋を分かつず、あわせて十三經の名を漏しているのは尙いまだ意を盡していないためである。然して後に張九韶の羣書拾唾、宮夢仁の讀書紀數略が採援編輯され、比較的に明備しているが、実は皆この書（紺珠）を藍本としている。事を踵たどむは易く創始するは難い、事を開き始めた應麟の功を没すべきではない」とその開明者の功を賛えている。その功は言うまでもなく名教を主内容とした類書のスタイルの創始者としてであり、やがて羣書拾唾や讀書紀數略と整備されて行くことになる。

以上宋代類書の略解を試みたが、十分に意を尽したともいえないし、中には帝王經世圖譜、職官分紀、歷代制度詳説、永嘉八面鋒、羣書會元、截江網あるいは、事林廣記、書言故事大全、詩學大成等の和刻本があつて日本でもよく使われた類書についても当然略解を加えるべきであるが前者はともかく、後者はすでに解題や詳細な研究

もあるゆえ割愛した。なお、金・元・明・清の類書については引き続き略解を加えるつもりである。

### 類書参考書目補遺

二十一、四庫全書考證 王太岳等纂輯 乾隆四十一年（一七八〇）敕撰 商務印書館四庫全書所収の主要な書の本文の考證。

二十二、四庫全書總目提要補正 胡玉縉撰。卷四十、類書類、類書類存目 民国二十六年（一九三七年）叢書子目類編所収 四庫全書所収の主要な書について四庫提要の誤りを正し、足らざるを補っている。

二十三、支那書籍解題 書目書誌之部 長澤規矩也著 昭和十五年（一九四〇）文求堂 書目の解題書として最も整備詳細。

二十四、四庫提要辨證 余嘉錫撰 一九五四年 中華書局 卷十六、類書類 四庫全書所収書の一部について提要の説を土台に詳細な考証を加えている。

二十五、書目類編 嚴靈峯編輯 成文出版社一九七八年以來刊行中 書目及び書目解題を輯めた叢書。

二十六、中國藏書家考略 楊立誠・金步瀛編、文海出版社

二十七、韻宋樓藏書志、儀顧堂題跋・續跋 陸心源撰 ともに書目叢編續所収 廣文書局

ついでながら、前々回に引き続き「類書の史的研究」に対して昭和五十一年度に文部省科学研究費一般研究Dを受けた研究の一部である。